

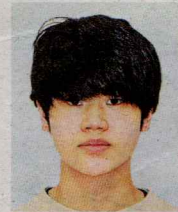
表す 感じる

# かほく防災記者 1期生レポート

## 迷わず避難 教訓生かす

仙台市宮城野中3年

阿部 真聖さん



阿部真聖さん

石巻市にある「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を8月13日に訪ね、同市の解説員草島真人さん(63)に話を聞いた。「知っていても分かっていても、できない」。この言葉が今も耳に残っている。

震災発生時、地域では津波が来ても30センチ程度と考えている人が多く、「津波が来た! 逃げろ!」と声をかけても逃げなかったという。無視して家に入ってカーテンを閉める人がいた一方、津波を目の当たりにして恐怖で足が動かなくなった人もいたらしい。ほかに避難が遅れた背景として「みんなが逃げないことで安心してしまおう」「事実より信じたい情報をうのみにしてしまおう」などの理由も考え

られるようだ。大きな災害が起きると、誰でも恐怖や不安から冷静ではなくなってしまう。草島さんも地震の後、家族が心配になり、車で海に近い自宅に戻り、津波に追われながら逃げた。だから「知っていても、分かっていても、できない」のだ。展示では、被災者のコメントが気になった。過去に警報、注意報が出さ



タッチ画面を操作(そつさ)して津波の体験談を視聴(しちよう)した

れても津波が来なかったの、震災でも来ないだろうと考え、避難が遅れた人や、川の方から津波が来ると思っていたいなかった人もいた。津波は来ないという思い込み、津波は海から来るという考えが、避難を遅らせた。シアターの映像には、救助活動をした自衛隊員や、かほく防災記者研修で話を聞いた閉上中遺族会代表の丹野祐子さん(53)をはじめとする被災者が登場した。全ての語り手が強く訴えたのは「迷わず逃げろ」。自分の命は自分で守る。そのため、まず自分が安全な場所に移動することが必要になる。最悪の事態に備え、日頃から避難訓練をしたこととはとても大事だ。しかし、「知っていても分かっていても、できない」という言葉を考えると、震災が起きたときに行動するには、強い意志も求められる。伝承館で学んだ教訓を今後の災害に生かすため、普段から家族ととるべき行動を約束し、一人でも迷わず避難できるようにしたい。